



Title	サハリンの言語世界：単語借用から見る
Author(s)	津曲, 敏郎
Citation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed., 1-10
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/38294">http://hdl.handle.net/2115/38294</a>
Type	proceedings
Note	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
File Information	01tsumagari.pdf



[Instructions for use](#)

## サハリンの言語世界：単語借用から見る

津 曲 敏 郎  
(北海道大学)

### 0. はじめに

本稿ではまずサハリンの言語状況を概観し、特に近年のウイльта語をめぐる動きを紹介する。次にサハリンの先住民言語の間に見られる単語の相互借用について、先行研究からいくつかの例を紹介するとともに、あらたな事例を提供する。最後に、単語借用以外の文法面や口頭文芸においても影響関係が見られることにふれ、「言語地域」としてのサハリンの重要性を指摘する。

### 1. サハリンの言語状況

サハリン島は面積 76400 km<sup>2</sup>、北海道よりわずかに小さい島である。その人口は約 70 万人 (1989 年)、うち先住民は約 3500 人 (全人口の 0.5%) にすぎない。

図 1 に、20 世紀初頭におけるサハリン・アムール地域の先住民言語の分布状況を示す。ここに示されているとおり、サハリンの主要な先住民言語として、ニヴフ語 (Nivkh)、ウイльта語 (Uilta)、アイヌ語 (Ainu) があげられる。ニヴフ語はいわゆる古アジア諸語 (Paleoasiatic ; 古シベリア諸語 Paleosiberian とも) に含まれるが系統的には孤立しており、アムール河口域にまたがって分布している。ウイльта語はツングース諸語 (Tungusic) の一つであり、同系言語は大陸のアムール川流域と沿海地方、中国東北地方からさらに北東シベリア一帯、東はカムチャツカまで、広く分布している。一方、アイヌ語は今日すでにサハリンでは行われていないが、北海道にわずかな話者を残している。こうした点で、サハリンが言語的にも大陸と北海道を結ぶ位置にあることが認められる。

表 1 に北方少数民族の人口構成をあげる (2005 年 1 月時点)。ウイльтаに次いで、エウエンキー、ナーナイというツングース系の民族があがっている。民族言語の話者数について、1989 年の統計ではサハリンでのニヴフ民族人口 2008 人のうち、22% (447 人) が母語話者とされていた (村崎・デグラーフ 1993)。ウイльтаについては、同じ 1989 年の統計では民族人口 200 人、うち 44.7% (89 人) が母語話者という数字があげられている。表 1 にも見られるように、今日ではニヴフ、ウイльтаとも民族人口は増えているものの、話者の比

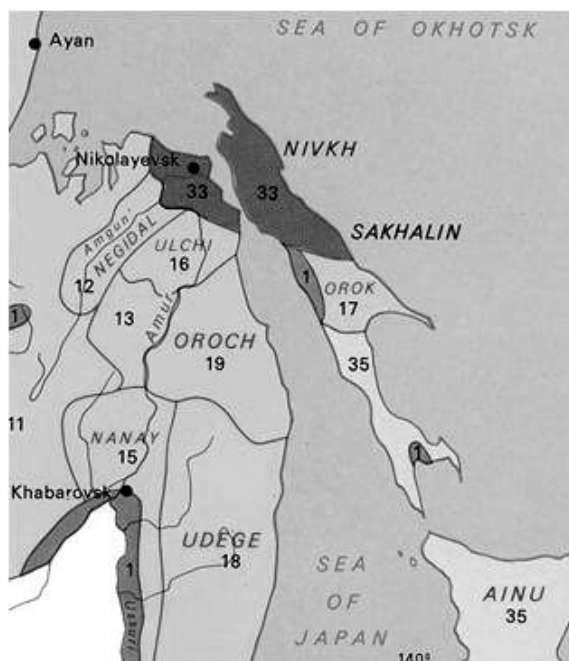


図1 サハリン・アムール地域の先住民言語  
(Wurm et al. 1996: Map 107 の一部を拡大)

率および絶対数は減少の一途をたどっている。ウイльта語について、事情に詳しい話者の一人であるエレーナ・ビビコワさんは筆者に対し、自分が承知している限りの存命のウイльта語話者として16人の名前をあげた (E. Bibikova p.c. 2007)。

民族名	ニヴフ	ウイльта	エウエンキー	ナーナイ	その他	合計
人口	2649	387	266	140	71	3513

表1 サハリン北方少数民族の人口 (SEIC 2006:15 から抜粋)

## 2. ウイльта語文字教本の刊行

ウイльта語に文字を制定し、その初等教本を作成しようという動きは1990年代から始まっていた。サハリン州政府の依頼を受けた池上二良・北海道大学名誉教授によって作成された文字案をもとに、ロシア科学アカデミーの検討を経て、ロシア字を基礎に補助記号を加える方式が正式に承認された (Ikegami 1994, 1996, 1998 ; 池上 2000)。一方で、上記のビビコワさんをはじめとするウイльтаの熱心な参画もあり、文字教本の中身も整えられていった。しかしながら、なかなか刊行に至らずに年月が流れたのは、おそらく資金面の問題が大きかったものと思われる。ようやく近年になって、地元企業であるサハリン・エナジー社の資金提供が得られ、2008年4月、刊行にこぎつけたものである (Ikegami, Bibikova et al. 2008 : 図2)。地元メディアも今回の教科書刊行を、ウイльтаにとって画期的な歓迎すべき出来事として報じた。報道では特に池上教授の役割を高く評価し、この教科書が国際的な協力のもとに実現したことを強調するとともに、刊行後まもなく米寿を迎えた同教授への敬意と祝意を述べたものが目についた (図3)。

このように、ウイльта語初の文字教本が刊行されるまでには、①研究者の寄与、②現地ウイльтаの人々の熱意と参画、③政府の認可・学界の支援、④地元企業の資金提供、そして⑤地域の支援・普及活動、といった諸条件が必要であった。これは今回のウイльта語文字教本の事例に限らず、少数民族言語の活性化にとって一般性のある条件と言えよう。とりわけ大企業が、言わば開発の代償として、少数民族文化に対する調査研究への支援を含む保護活動に積極的に取り組んでいる姿勢は特筆すべきである (上で表1を引用した SEIC 2006 もそのような調査報告の一部である)。

ウイльта語がすでに危機的状況にある今、あえてこのような文字教本が刊行されたことの意義はどのようなところにあるだろう？ この教本によるウイльта語教育が学校で実施されるには、カリキュラムや教師の問題もあるし、子どもたちの意識や学習意欲の問題もあろう。学習の展開に応じて、副読本や学習用辞典を用意する必要もある。今後の追跡調査と、継続的な支援が必要である。ちなみに、ウイльтаの人たちの「副読本」となることを意図して、池上教授採集のテキストのロシア語版 (ロシア字によるウイльта語原文表記とロシア語訳) を、上記ビビコワさんの協力のもと、この教科書に先立って刊行し、現地に寄贈した (Ikegami/ Bibikova tr. & Tsumagari ed. 2007)。ともかくも少数民族自身が自分たち本来の言語を書き表わし、読む手段を手にしたことの意義は大きい。真の意味での「復興」がのぞめない言語が文字化されることの意義については別に論じた (津曲 2003, 2006, 2007)。

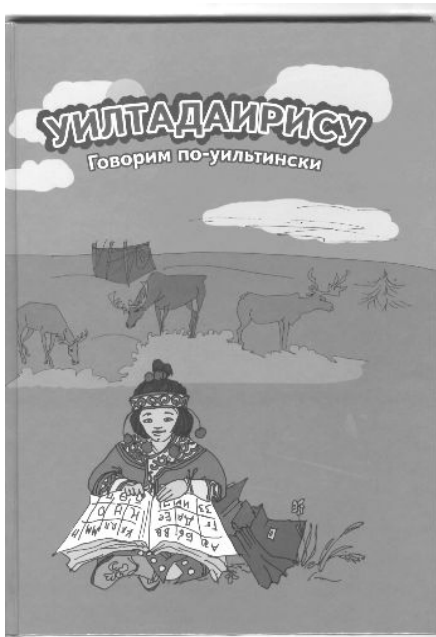


図2(上)ウイльта語文字教本(2008年刊)の表紙

図3(右)文字教本の刊行を伝える記事 (Vedomosti, 2008/7/18)。写真左は刊行された文字教本を見る池上教授(筆者撮影提供)、右の2枚は記念式典(2008年4月)の様子。



池上教授は、ウイльта語の文字化プロジェクトのリーダーとして、この本を完成させた。...

この本は、ウイльта語の学習者にとって重要な教材となる。...

3. 単語借用の事例

サハリンの諸言語をめぐる単語借用については、北海道のアイヌ語や大陸のツングース諸語にも言及しながら、すでに池上による諸論考で少なからぬ例が指摘されている...

(1) イナウ「木幣」: Ain. inaw / Uil. illau (<\*ilawun), Orc. ilau; Man. ila-「花が咲く」/ Niv. inau, nau (池上 1980)

ここではアイヌ語が l の子音を欠くことから、これを n で置き換えたものとして、ツングース諸語の形がもとになっており、その原義は上記満州語の単語に見られるようなところにあつたことを述べている。

(2) コタン「村」: Ain. kotan / Uil. xotto(n)-「都市、まち」(Ulc. Nan. Neg. Orc. Udh. Man. 等の Tun.にも広く分布) / Niv. xota, xotaj 「都市」. Cf. Mon. xota(n) 「都市」/ Tur. kotan 「家畜小屋、囲い」(池上 1980)

大陸での広い分布をもとに、モンゴル語から満州語等を経てサハリンに入ったことが想定されている。

(3) トンコリ「五絃琴」: **Ain. tonkori** / **Uil. tək̄kəɾə** 「一絃琴」, **Man. tenggeri** 「三絃」 / **Niv. t'yjɾ** 「一絃琴」(池上 1988)

ここでも満州語の同源語の存在をもとに、大陸起源であることが述べられる。

(4) シントコ「行器」: **Ain. sintoko** / **Uil. sittoo** 「樽」 / **Niv. s'intyχ** 「樽」(池上 1980)

この語についてはアイヌ語がもとになっており、そのアイヌ語は日本語から入ったと見られる (cf. **Jap.** 俊徳丸) という。同源語は大陸のオロチ語にも広がっている: **Orc. sindonjo** 「樽」(Tsintsius 1977: 88)

以上はアイヌ語に広く分布している単語の例であるが、サハリン・アイヌ語にのみ見られる借用語として、次のような例が指摘されている。

(5) 「百」: **SakAin. tanku** / **Uil. tangu**, **Man. tanggū** / **Niv. n'raŋq** (<\**n-taŋq*) (Krejnovich 1955; 池上 1990)

ここでは満州語の語形がウイльта語等を経て、サハリン・アイヌ語とニヴフ語に広まったものであろう。

(6) 「ロシア人」: **SakAin. nuca** / **Uil. luča** / **Niv. loč'a** (池上 1990)

これもツングース諸語の形がもとになって、ニヴフ語とサハリン・アイヌ語に入った。語頭子音については、ツングース語がもとの *r-* (ロシア語 *rossija, russkij*) を避けて *l-* で取り入れた後、上記(1)と同じ事情でアイヌ語 *n-* が対応している。

(7) 「犬の首輪」: **SakAin. seta hana** / **Uil. xala** / **Niv. hal, halŋ** (池上 1990)

ニヴフは畜犬に独自の文化と語彙を持っており、この語はニヴフ語がもとになっていると見られている。アイヌ語 *seta* は「犬」、*n* の対応はやはり上記(1)(6)と同様。

#### 4. 「セイウチ」をめぐって

ここではサハリンにとって外来の要素であることが明らかな借用語の一例として、「セイウチ」とその関連語(特に「牙」)について取り上げてみたい。なお、これについては別稿でも詳しく論じているので(津曲 刊行準備中)、以下では骨子のみを述べる。

(8) **SakAin. soh** 「セイウチ」(服部 1981 [1964]; 北海道の諸方言および千島方言は空欄); **kita** 「牙」(北海道諸方言 *sikite* 服部 1981 [1964])

(9) **Uil. suixə** 「海獣の一種(せいうち G)、そのきばを得れば幸運のさずかりもの」; **sutta** 「きば(牙)(とどやくまにある J)」(池上 1997; G, J は報告者による情報); **sukkə** 「神様からの授かりもの」(潤瀉 1981) (ウイльта語 *su/* = [ʃu])

(10) **Niv. č'uj, č'uɲnyx** 「セイウチ」; **č'uj č'ob, č'uɲnyx č'ob** 「セイウチの牙」; **č'ob** 「牙」(Savel'eva & Taksami 1965, 1970 によるアムール方言); 「海象(セイウチ) *fuɲɲux* の牙に彫刻を施し寶物として珍重する風も近年まで存した」(服部 2000:100、サハリン東南部方言); **fuɲɲa** 「セイウチ」(津曲 2007 採集のサハリン方言; *ɲa* 「獣」を含む複合語か)

サハリンの住民にとってセイウチは基本的に牙のかたちで、珍重すべき交易品として渡

ってきたものであり、そのことは上例(9)(10)の説明中にもうかがえる。(9)に加えたウイльта語 *sukkə* は「セイウチ」や「牙」と無関係かもしれないが、音と意味の点で関連性を仮定することもできよう。形の点では、一見して、まずサハリン・アイヌ語 *soh* 「セイウチ」とニヴフ語 *č'ob* 「牙」の類似が目をつくる。またウイльта語の語例がいずれも *su-* [ʃu] であるのに対し、ニヴフ語「セイウチ」が *č'u-* (表記によっては *ʃu-*) の語頭音をもつことも注意される。これらの言語の間では、(Sak)Ain. Uil. (を含む Tun.) *s-* / Niv. *č'-* の対応を示す次のような例が知られている：

- (11) Ain. *san* 「棚、台」 / Uil. *saan* 「魚を干す掛け木」(他に Ulc. Nan. Neg.にも) / Niv. *č'ay* 「魚の乾燥棚」(池上 1994a, cf. Jap. サン, 漢語「棧」; Krejnovich 1955:153)  
 (12) SakAin. *saxha* 「箸」 / Uil. *sabuu* (Man. *sabka*, 他に Nan. Ulc.などにも) / Niv. *č'afq* (池上 1994a; Krejnovich 1955:139-140, 163)  
 (13) Tun. *sama(n)* / Niv. *č'amj, č'am* 「シャマン」(Krejnovich 1955:139-140, 163)

これらは、いずれもツングース語もしくはアイヌ語の *s-* を、ニヴフ語が *č'-* として受け入れたと考えられる。ニヴフ語では固有語の名詞自立形語頭に *s-* が立つことは少なく、複合等に際して子音交替の結果、*#č'- > =s-* となる場合が多いという事情がある (*#* は語境界、*=* は接語境界)。逆にニヴフ語 *č'-* を出発点と考えると、それがアイヌ語やツングース語で *s-* になる必然性はない。

次にツングース諸語の「セイウチ」と「牙」をあらわす語を、ツングース諸語の比較辞典である Tsintsius et al. (1977) によって見てみる：

- (14) Ulc. *čujəxə* 「セイウチ; セイウチ・アザラシの牙」, Nan. *čujəxə*, Orc. *čuiəxə ~ čujəxə*, Udh. *čuhia* 「セイウチ」(Tsintsius et al. 1977:410); Uil. *sujəxə* 「セイウチ」(同書:121; ウイльта語のみ)  
 (15) Evn. *urka ~ hurka ~ hurko*, Evk. *surka ~ hurka ~ turka*, Neg. *sojka*, Orc. *sokka*, Udh. *suka*, Ulc. *suča*, Uil. *sutta*, Nan. *soika ~ sojka* 「(セイウチ、象の) 牙、門歯」, Man. *sučun wəixə* 「上下の前歯、門歯」(同書:130)

ウイльта語を除くツングース諸語の「セイウチ」については、同書も示唆するとおりニヴフ語の語形とよく似ており、おそらくニヴフ語からの借用であろう。ウイльта語のみ語頭音が異なっていることになるが、同書ではこれを別項目(したがって別語源)としている。一方、「牙」については全ツングース語に同源語が広がっており、ウイльта語 *sutta* もここに含まれている。なお上記(9)のウイльта語 *sukkə* 「神様からの授かりもの」について、同書では「Uil. *sukkə(n-)* < \**sujkən* 狩猟のお守り」として、エウエンキー語 *siŋkəən* 「狩の成功」などの語と同源と見ている(同書:91)。

そこで、セイウチの生息地に分布するチュクチ・カムチャツカ語族の語形を確認しよう。チュコトカからカムチャツカにかけて、チュクチ語、コリヤーク語、アリユートル語、イテリメン語等の言語が分布しており、同系の語族をなすと見られている。ただしイテリメン語の同系性には疑問も呈されており、以下の「セイウチ」等の語でもこれを除く3言語間で同源語が見られる：

(16) **Chk.** *rarka* ~*rarkə*/ **Kor.** *jajka*/ **Alt.** *tatka* 「セイウチ」 (Mudrak 2000:204, Zhukova & Kurebito 2001: 94, Fortescue 2005:63)

(17) **Chk. Kor. Alt.** *waŋqət* 「セイウチの牙」 (Fortescue 2005:324)

例(16)に見られる特徴的な子音対応は他の語例からも裏付けられるものであり、同源語として \**šaška* (Mudrak 上掲)、\**ǰaǰka* (Fortescue 上掲) のような祖形が立てられている。(17)の語は一見して、ツングース諸語の「牙」(15)とは無関係であるが、一方で、チュクチ語の *rarka* 「セイウチ」の語形が、(15)で見たエウエン語の「牙」を表わす語(特に *urka*) と関係づけられそうなのが注意を引く。分布上、チュクチ語と接触した可能性が最も高いツングース語はエウエン語であり、相互に借用関係が認められている。エウエン語の語形は、語頭の *r-* を避けて脱落させ、母音調和によって *a > u* の変化を経た結果として説明できる。(15)に見られる **Ev.** *hurka* (~*hurko*) の語頭子音は二次的に生じたものであり、それが **Evk.** *surka* (~*hurka* ~*turka*) を経て、アムール流域に拡大したものと考えることができる。「セイウチ」から「牙」への意味変化も、ツングースにとって「牙」こそが関心事であったすれば、自然である。

以上に見てきたところを簡単にまとめると、次のようである：

- ① **Chk.** *rarka* 「セイウチ」 > **Ev.** *urka* ~*hurka* 「牙」 > **Evk.** *surka* > **Neg. Nan.** *sojka*, **Ulc.** *suča*, **Uil.** *sutta*, **Orc.** *sokka*, **Udh.** *suka*
- ② (①? >) **SakAin.** *soh* 「セイウチ」 > **Niv.** *č'ob* 「牙」
- ③ (①? > **Uil.** *suixə* 「セイウチ」 > ?) **Niv.** *č'uy*, *č'uyŋyx* 「セイウチ」 > **Ulc.** *čujəxə* 「セイウチ ; セイウチ・アザラシの牙」, **Nan.** *čujəxə*, **Orc.** *čuixə* ~*čujəxə*, **Udh.** *čuhia* 「セイウチ」
- ④ (①? >) **Uil.** *sukkə* 「授かりもの」

②のサハリン・アイヌ語および③のウイльта語の「セイウチ」を意味する語が互いに関係があるのか、またどこから来たのか、については確実なことは言えない。想像をたくましくすれば、チュクチ・カムチャツカ語族の「セイウチ」を表わす語が「牙」としてツングース諸語に伝わり(①)、そこからさらにウイльта語で *sutta* 「牙」とともに二重語 (*doublet*) として *suixə* 「セイウチ」を生じ、それがサハリン・アイヌ語とニヴフ語に入ったことが考えられるかもしれない。ウイльта語 *sukkə* も、ことによるとこのような二重語の一つであろうか。あるいはウイльта語 *suixə*, *sutta*, *sukkə* に見られる意味のつながりと、音形 (*su-*) の共通性は単なる偶然と見るべきだろうか。この点は今後の課題とせざるを得ない。

## 5. 言語地域としてのサハリン

上の例からもうかがえるように、サハリンの言語間の関係はなかなか複雑であり、今後さらに探求すべき課題が多い。池上(1980)が示唆するように(上記3(1)参照)、すでに今日失われた言語の存在を想定する必要もあろう。最後に語彙の借用以外の面でも、相互に影響関係が想定できることを指摘し、サハリンを一つの「言語地域」(*linguistic area*) としてとらえなおすことの可能性と重要性にふれて、稿を閉じたい。

文法形式や構造面での相互影響について、具体的に取り上げたものはまだ多くないが、

一例として津曲（1997）では、名詞並列構造における次のような形式・構造上の類似を指摘した：

(18) **SakAin.** *ohkayo-ka mahtekuh-ka okayahci*. 「男も女もいる」(服部 1981[1964]:325)

(19) **Uil.** *sii-kkəə bii-kkəə ɲənnəepu*. 「君とぼくが行く」(池上 1994b:160)

(20) **Niv.** *vətək-xə vəmək-xə maŋgut ezmud'gu*. 「彼の父と母とは大変喜んだ」(Panfilov 1962:165)

いずれも並列される名詞の両方に同じ標識が付され、その音形も類似していることが注意される。こうした類型的な比較を広げることで、その間に何らかの影響関係を仮定すべきケースも出てくるであろう。

口頭文芸の形式・内容に関する比較も興味深い課題である。山田（2008）は、サハリン諸言語のある種の口頭文芸において、文末に次のような伝聞形式が多用される事実注目し、言語接触の可能性を示唆している：**SakAin.** *manu/ Uil.* =*ndaa~ndəə/ Niv.* *furu* 「～という、～だそうだ」。

またある種の「語りもの」のジャンル（**SakAin.** *tuytah/ Uil.* *niɲmaa/ Niv.* *ɲastund*）において、歌の挿入、折り返し、合の手などの特徴を（部分的に）共有する点で、形式上の類似が見られることが注意される（cf. 山田 印刷中、佐藤 1994、丹菊 2001）。ちなみにニヴフ語にはツングース諸語と共通する口頭文芸ジャンル名がある（ともに「昔話、説話」にあたる）：**Uil.** *təluɲu* (**Ulc.** *təluɲu* など他の **Tun.**にも) / **Niv.** *t'ylgu* (Savel'eva & Taksami 1970:388), *tulyguŋ* (服部 2000:113)。この語は、ニヴフ語がウイльта語（あるいはウリチャ語）から借用したと思われるが、このように基本的なジャンルの呼び名が共通することは両者の関係の深さを物語る一例といえよう。

### 言語名略号

**Ain.** アイヌ語, **Alt.** アリュートル語, **Chk.** チュクチ語, **Evn.** エウエン語, **Evk.** エウエンキー語, **Jap.** 日本語, **Kor.** コリヤーク語, **Man.** 満州語, **Mon.** モンゴル語, **Nan.** ナーナイ語, **Neg.** ネギダル語, **Niv.** ニヴフ語, **Orc.** オロチ語, **SakAin.** サハリン・アイヌ語, **Tun.** ツングース諸語, **Tur.** チュルク諸語, **Udh.** ウデヘ語, **Uil.** ウイльта語, **Ulc.** ウリチャ語

### 参考文献

- 池上二良（1980）「アイヌ語のイナウの語の由来に関する小考：ウイльта語の *illau* の語原にふれて」『民族学研究』44/4:393-402. [池上 2004 に再録]
- \_\_\_\_\_（1988）「ことばの上からみた東北アジアと日本」『北海道の文化』59:34-44, 北海道文化財保護協会. [池上 2004 に再録]
- \_\_\_\_\_（1990）「日本語・北の言語間の単語借用」『北海道方言研究会会報』30:2-11, 北海道方言研究会. [池上 2004 に再録]
- \_\_\_\_\_（1994a）「アイヌ語の大陸語的要素」北方言語研究者協議会編『アイヌ語の集い』159-169, 北海道出版企画センター. [池上 2004 に再録]



- \_\_\_\_\_ (1994b) 「樺太のウイльта語の感嘆・疑問その他の語尾について」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集 ことばの世界』158-167, 北海道方言研究会. [池上 2001 に再録]
- \_\_\_\_\_ (1997) 『ウイльта語辞典』北海道大学図書刊行会.
- \_\_\_\_\_ (2000) 「本研究プロジェクトと北方言語研究」『危機に瀕した言語について：講演集(1)』(ELPR: C-001) :73-76, 大阪学院大学情報学部.
- \_\_\_\_\_ (2001) 『ツングース語研究』汲古書院.
- \_\_\_\_\_ (2004) 『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会.
- 服部四郎 (編) (1981) [1964] 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 服部 健 (2000) 『服部健著作集：ギリヤーク研究論集』北海道出版企画センター.
- 潤潟久治 (1981) 『ウイльта語辞典』網走市北方民俗文化保存協会.
- 村崎恭子・T. デグラーフ (1993) 「サハリンにおける少数民族の言語状況」村崎恭子 (編) 『サハリンの少数民族』:5-11, 横浜国立大学.
- 佐藤知己 (1994) 「近隣諸民族との比較からみた yukar」『北海道教育大学紀要 (第 1 部 B)』45/1:77-81.
- 丹菊逸治 (2001) 「サハリンアイヌ散文説話の一ジャンル *tuytah* について：「挿入歌」からみた文字資料」村崎恭子 (編) 『少数民族言語資料の記録と保存：樺太アイヌ語とニヴフ語』(ELPR: A2-009) :69-90, 大阪学院大学情報学部.
- 津曲敏郎 (1997) 「ニヴフ語, ウイльта語, アイヌ語の名詞並列構造」宮岡伯人・津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』3:131-142, 京都大学大学院文学研究科.
- \_\_\_\_\_ (2003) 「書きことばの創生：少数民族が文字をもつとき」『国文学』48/12 (2003 年 10 月号) :10-14, 学燈社.
- \_\_\_\_\_ (2006) 「話者による危機言語の記録とその活用：ウデへ語絵本作りをとおして」北海道立北方民族博物館 (編) 『環北太平洋の環境と文化』:134-143, 北海道大学出版会.
- \_\_\_\_\_ (2007) 「無文字言語のゆくえ：北方少数民族言語はどう生き残れるか？」津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』14:159-166, 北海道大学大学院文学研究科.
- \_\_\_\_\_ (刊行準備中) 「セイウチの来た道：語源から探る」菊池俊彦 (編) 『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会.
- 山田祥子 (2008) 「ウイльта語口頭文芸の伝聞形式：サハリンにおける言語接触の可能性」『北海道民族学』4:63-71, 北海道民族学会.
- \_\_\_\_\_ (印刷中) 「ウイльтаの語り物ニグマーについての予備的考察」『昔話：研究と資料』37, 日本昔話学会.
- Fortescue, M. D. (2005) *Comparative Chukotka-Kamchatkan Dictionary*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Ikegami, J. (1994) Proekt pis'mennosti ujl'tinskogo yazyka. *Acta Slavica Iaponica* 12: 253-258, Sapporo: The Slavic Research Center, Hokkaido University. [also in Ikegami 2001]
- \_\_\_\_\_ (1996) Pis'mennaya praktika na ujl'tinskom yazyke: dopolnenie k proektu pis'mennosti

- ujl'tinskogo yazyka. *Acta Slavica Iaponica* 14: 120-123, Sapporo: The Slavic Research Center, Hokkaido University. [also in Ikegami 2001]
- \_\_\_\_ (1998) Pis'mennaja praktika na ujl'tinskom yazyke: prodolzhenie. *Acta Slavica Iaponica* 16: 181-183, Sapporo: The Slavic Research Center, Hokkaido University. [also in Ikegami 2001a]
- \_\_\_\_ (2007) *Skazaniya i legendy naroda ujlt'a*. Translated by E. A. Bibikova and edited by T. Tsumagari, Sapporo: Graduate School of Letters, Hokkaido University.
- Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon & I. Ja. Fedjaeva (2008) *Uiltadairisu: govorim po-ujl'tinski*. Yuzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- Krejnovich, E. A. (1955) Gilyatsko-tunguso-man'chzhurskie yazykovye paralleli. *Doklady i Soobshcheniya Instituta Yazykoznaniya AN SSSR* 8: 135-167.
- Mudrak, O. A. (2000) *Etimologicheskij slovar' chukotsko-kamchatskikh jazykov*. Moskva: Yazyki russkoj kul'tury.
- Panfilov, V. Z. (1962) *Grammatika nivkhskogo yazyka I*. M/L: Nauka.
- SEIC (2006) *Sakhalin Indigenous Minorities Development Plan*. Sakhalin Energy Investment Company Ltd.
- Savel'eva, V. N. & Ch. M. Taksami (1965) *Russko-nivkhsnij slovar'*. Moskva: Izdatel'stvo Sovetskaya Entsiklopediya.
- \_\_\_\_ (1970) *Nivkhsko-russkij slovar'*. Moskva: Izdatel'stvo Sovetskaya Entsiklopediya.
- Tsintsius, V. I. et al. (eds.) (1977) *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov*: Tom.2. Leningrad: Nauka.
- Wurm, S. A. et al. (eds.) (1996) *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and the Americas*: Vol. 1. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Zhukova, A. N. & T. Kurebito (2001) *A Basic Topical Dictionary of the Koryak-Chukchi Languages*. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

## The Linguistic World of Sakhalin: Viewed from Lexical Borrowing

Toshiro TSUMAGARI  
(Hokkaido University)

The present paper intends to be a brief introduction to the linguistic world of Sakhalin. The first two sections include a brief description on the linguistic situation of Sakhalin, with special reference to the recent publication of the Uilta first primer. In Section 3, some examples of lexical borrowing among Sakhalin languages are drawn from previous studies. The fourth section is devoted to an attempt to trace the route of the words for 'walrus' and 'tusk'. As a tentative result, a Chukchi word for 'walrus' was borrowed by Even with changing the meaning into 'tusk', and then it spread to most of

the Tungusic languages. The Uilta word for ‘walrus’, which may be a doublet of the word for ‘tusk’, was possibly introduced into Nivkh and Sakhalin Ainu. Then the Nivkh form for ‘walrus’ was brought into other Amur Tungusic. Finally, the author remarks possible mutual influences in grammatical structure and oral literature, and suggests the importance of Sakhalin as a linguistic area.